

紹介

紹介

●國史叢說

文學博士 八代 國治著

本書は故八代博士の幾多の遺稿中、主要なるもの廿二編を收めたものである。博士は鎌倉南北朝時代の史實、殊に莊園制度の研究に力を盡され、其著書論文が學界に裨益する所極めて多かつたのは周知の事實である。今回それ等の遺稿を整理し一書に纏めて刊行されるに至つた事は極めて便利且つ有益な事といはねばならぬ。本書に收められた諸編の多くは既に博士の生前世に公にされて定評があるからこゝには其紹介を略するが、巻首に載せられた「長講堂領の研究」は博士の最も心血を凝がれたものであつて、兩統迭立問題に就き従來の學說の誤謬を正し事實の真相を明にされた點が少くない。就中此經濟的勢力を基礎として兩統の迭立を可能性のものとしたことから、當時政治の實權は關東に移り、皇室は虚位を擁するに過ぎないものと思はれてゐたけれども、皇室は猶ほ幕

府の干渉を受ける事なしに獨立せる財源を有し、大なる經濟的勢力を保有されてゐたことを力説し、此事を知らなければ兩統迭立の問題は勿論、建武中興も南北朝の分立も其真相を明にする事は出来ないこと述べられた點は主要なる部分であつて、其他長講堂の起原を明にし、同堂領の傳領を精細に考究された點なども注意すべきであらう。(菊版五一八頁、東京吉川弘文館發行、定價不詳)

●日本國民思想史

文學士 清原貞雄著

近時我が國民思想の論議せらるゝに當りて古來如何なる發達變遷を爲し來つたかを觀察することは、我が文化史研究の上に於て極めて必要な事であり、最も有意義の事であるが、それには種々の困難が伴つて居つて、従來比較的等閑に附せられて居つたのである。然るに著者は夙に此方面の研究に力を注ぎ、種々の著書論文を公にせられたが、今夫等の論著及び汎く諸學者の研究の成果を參酌して此の書を著はされたのである。全編を固有信仰並に思想、大陸思想の輸入、大化改新、大化以後奈良

朝時代に至る思想界、平安朝初期、藤原時代、平安朝末期、鎌倉時代、文教頹敗期の思想信仰、徳川時代、の十章に大別し、更に細節に分つて大古より徳川時代に至るまでの國民思想の發達變遷を述べてある。思想史さいへば其の取扱はるべき範圍は極めて廣汎で且つ複雑なものであるが、是れだけ纏められた著者の努力は多きすべきであつて、宗教、思想方面の研究者には裨益する所が少くなからう。唯だ極めて些細な事であるが三四〇頁の邊、親鸞の事を説かれてゐる所は一般の説に従はれて居るがそれにしても親鸞の廟所に龜山天皇が久遠實成阿彌陀本願寺の號を賜はつたさいふ事まで其儘取入れられるのはさうかと思ふ。（菊版七二七頁、寶文館發行、價五、五〇）

● 梁川星巖翁附紅蘭女史

伊藤 信著

梁川星巖は幕末國家多事の際に出で、陽には詞章を玩び陰には尊王攘夷の急先鋒となつて國民を鼓舞指導した稀世の偉人であるが、其の一代の事蹟を闡明した書籍は未だ世に存せなかつたのである。著者は成童に當つて學

風を翁の流に汲み、少時より屢翁の事蹟を聞き、又其遺著を読んで翁の風格を景慕するこゝが深かつたから如何にもして翁の隠れたる事蹟を世に傳へたく思ひ諸方を歴訪して普ねく翁に關する資料を抄録蒐集し、苦心十餘年にして茲に本書を完成するに至つたさいふこゝである。

今之を繙讀するに全體を前後二編に分ち、前編を緒言、家系、少壯時代、西遊時代、流寓時代、江戸時代、京都時代の七章に、後編を著書、詞藻、佛教論、儒學說、爲人、紅蘭女史の才藻、逸話、門人の指導、身後の餘榮、結語の十章に分ち、更に之を細別して詳細に翁及び女史の事蹟を記述してあつて、之により當時の志士の交遊状態を知り得るに共に翁の畢生の本志が那邊にあつたかを明かにすることが出来る。殊に佛教論、儒學說の兩章に於ては翁の兩者に對する懷抱を鮮明ならしめてあつて、動もすれば佛教を異端邪說視した當時の儒學者間にも翁の如き卓識者が有つて深く佛教を究めて宇宙の眞理を觀得し、儒佛の間にも相通する所がある事を説いたのは注意すべき事であつて、本書は營に文學方面及び幕末史の

研究者ばかりでなく、宗教、思想方面の研究者にとつても亦一讀せなければならぬものであると思ふ。(菊版七三九頁、岐阜市梁川星巖翁遺德顯彰會發行、價五・〇〇)

●日本陶器史

今泉 雄作 共著
小森 彦次

本書は現今世に傳はつて居る本邦の陶器を、一々現品に當つて其の特色を明かにし、傍ら之を文献に徴して系統的に鑑賞を試みたもので、考古學の範圍に屬するもの即ち太古から其の制が有つたを稱せられる齋瓷或は古墳等より發見される土器陶器の類に就ては之を其方面の研究に委ね、専ら釉藥の法が我國に傳へられてより後に出來た陶器のこゝに就いて述べたものである。而して本書の特色とする所は、其の記述を在來試みられて居る如き陶窯國分けの法に由らずして、陶器發達の迹に從つて系統的に考究しやうと試みた點である。本論を九編に分ち、第一編を瀬戸焼、古瀬戸風と志野織部風の發展、等に、第二編を備前焼一名伊部焼と備前伊部焼風の陶器と、信樂焼と信樂燒風の陶器と、等に、第三編を唐

津燒、現川燒、等に、第四編を樂燒、本阿彌光悅と空中齋光甫と、等に、第五編を京燒と野々村仁清と、粟田燒の名家等に、第六編を萬古燒、萬古燒風の陶器、第七編を吳祥瑞五良大夫、伊萬里燒、等に、第八編を九谷燒、湖東燒、第九編を陶製人形の名工、古陶器模造の妙手に分ち、更に是等を細目に分つて各燒の起原、特色、名家等に就いて詳述してある。其中、第一瀬戸燒の編に於て、茶入の銘及び窯分けの事を述べてあるのは、名物茶入を見、且つ其の眞價を知る上に極めて便利である。書中の所々には茶入、水指等の挿畫十二葉を收めてある。(菊版五二五頁、雄山閣發行、價五・二〇)

●湖東燒之研究

北村壽四郎著

湖東燒は徳川時代の末期に彦根城下に於て開窯された品質頗る優秀で一種の特色を有して居つた燒物であるが、後逆境に陥り、終に明治の中年に廢滅に歸したのである。著者は斯る名器の沿革頗末が歲月を経るに従ひ愈不明となるを遺憾とし、曩きに彦根藩陶器方の書類を搜

り、又當時の遺老等に質して『湖東陶志』を編纂し、其後猶ほ熱心なる調査を繼續すること廿餘年にして此度それ等の業績を纏めて發表せられるに至つたのである。内容は總説、民窯湖東燒(絹屋窯)、藩窯湖東燒、民窯湖東燒(山口窯)、樂燒、民窯湖東土燒、民業赤繪湖東燒、藩窯圓山湖東燒、民窯圓山湖東燒、民窯長濱湖東燒、湖東燒職人の京都に於ての活動の十一章に年表及び索引を附し廿四葉の挿圖を添へてある。中にも藩窯湖東燒の章は本書の主要なる部分で、井伊直亮が湖東燒の優秀なものを作つて立派な國産を興さうとの趣旨から、民窯を藩窯として以來、代々の藩主が經營の困難なるにも拘はらず別して幕末政治家として有名な直弼が苦心慘澹他國産に劣らぬものにしやうと努力したこゝより、遂に藩窯を廢止するに至るまでの狀況を敘述してあつて頗る興趣を惹く其他の各章も藩窯となつた前後の事を述べてあつて、當に鑑賞家蒐集家若しくは製陶家の參考となるばかりでなく、我國の藝術史産業史の研究者にこつても亦好個の參考なるものであり猶ほ直弼の趣味の半面を窺ふこゝも

出来るものである。(菊版三九四頁、湖東燒の研究出版後援會發行、價六・〇〇)【以上松野】

●郷土制度の研究

小野 武夫著

我國に於ける農政の沿革が兵制と相關る處は甚だ遠く且甚だ深く、時には兵制即ち農制であるやうに觀えた。徳川時代に至つては、所謂郷土は分布區域を局限されたけれども、近世社會史及び經濟史上に於ては可なり重要な役目を帯びて一方に於ては武士として待遇を受くる。共に他方に於ては地主としての經濟生活を營み以て郷村の中心となつたものである。本書はその郷土に關する制度を研究せんとし、主として徳川時代に於ける郷土の本質を明かにし、此制度が維新と共に廢滅した事情及び其後に於ける彼等の生活の一斑を叙し且つ現代社會に及ぼした影響を見やうとするのであるけれども、郷土制度の前身であつた兵農一途及びそれが分離するに至る推移をも知らんしたものである。従つて第一章を序論とし、その中に於て莊園制度と武士の發生、莊園の崩壊と兵農